

分野番号⑨ 小学校 学校教育の部

学び続ける学校をめざして —ESD と NIE の取組から—

奈良市立朱雀小学校 教諭 中村 友弥

1 実践内容

私は、ESD (Education for Sustainable Development、持続可能な開発のための教育) やNIE (Newspaper In Education) に取り組み、15年目を迎える。NIEでは、奈良県NIEアドバイザーとして活動し、情報化社会の進展、国際化の加速など様々な変化に対応するため、教育課題への取り組みを進めてきた。最近では、新聞記事から能登災害等を取り上げ、防災教育や平和学習に活用している。ESDでは、奈良教育大学のESD・SDGsセンター主催のセミナーなどを中心に研究し、児童の「価値観の変容」と「行動化」を大切に、授業づくりを行ってきた。「価値観の変容」とは、持続可能性への理解と関心の向上や多様性と包摂性の尊重などがあり、社会全体の意識と行動にポジティブな影響を与える。「行動化」は、持続可能な開発の理念を理解し、それを日常生活や社会的責任に結びつけるプロセスである。急速に変化する社会を生きる児童にとって、ESDで培った力は必ず役に立つと信じている。

(1) ESD と雅楽 ～西大寺北小学校との交流～ 第6学年

春日若宮おん祭りは、奈良市では、ほぼ全ての市立小・中学校が12月17日の授業を短縮授業とし、多くの児童生徒がおん祭りに参加できる環境にある。しかし、朱雀小の児童の多くは、身近な行事という認識が少なく、短縮授業となっても近くの商業施設に遊びに行く場合がある。雅楽は、1300年以上の歴史を持つ日本の伝統音楽の1つであり、古典的な音楽および舞踊の形式である。おん祭りは、雅楽との関係が深い祭りで、伝統音楽と神道の儀式が結びついている。本実践は、3



つの学びで構成され、第1に春日大社の南都楽所さんによる演奏や和楽器の体験、第2雅楽の調べ学習、第3に協働で学びを進める奈良市立西大寺北小学校とオンライン交流である。本物に出会うことで当事者意識を養い、知識を深めた。おん祭りと雅楽のような伝統文化の持続可能性について意見を交流し、応援し支える立場を経験することで、雅楽や伝統文化に親しみを抱くようになった。

(2) VRを活用した防災学習 第6学年

2024年1月1日16時10分石川県能登地方珠洲市を震源地とした最大震度7の大地震が発生した。冬休み明けの児童たちの話題だったが、次第に薄れ、TVや新聞の中だけの出来事のような他人事な雰囲気が生まれていた。そこで、NHK奈良にご協力いただき、以前から計画していた3学期の防災学習を変更して導入に能登災害の様子を見られるVRを活用した。能登取材された時の様子や報道での葛藤や使命について話を聞きながら、災害被害の様子を体験し、防災・



減災の学びを深めた。この学習では、4つの成果があった。

VRを通して、まるで自分が現地にいるかのような臨場感あふれる体験ができることで、地震の恐ろしさを肌で感じる事ができたこと。映像や写真だけでなく、VRという没入感のある体験は、児童たちの記憶に刻み込まれ、防災意識の定着につながったこと。被災者の心情や、報道に携わる人々の葛藤に触れることで、他者への共感力や思いやりの心を育んだこと。災害時の行動や避難の大切さを再認識し、日頃から防災意識を持って生活するきっかけとなったことである。

(3)「新年の抱負～1月1日の新聞広告から～」 第3学年

1月1日の新聞には、各企業が新年の抱負や方針を広告としている。それぞれの企業が乗せている広告には、各企業の魂が込められていると言っても過言ではない。その内容を読み取り、自分の新年の抱負に生かす活動を行った。まず、企業の新聞広告から気になった1枚を選ぶ。次に、なぜこのような広告(抱負)にしたのかを企業のつもりで考える。最後に、学んだことを生かして抱負を作成した。この学習では、企業が社会に対してどのような役割を果たしているのか、どのような価値観を持っているのかを考えるきっかけとなった。企業の抱負を参考にしながら、具体的な目標を設定し達成に向けて努力する意欲を高め、企業の抱負を解釈し、言葉で表現することで、表現力やプレゼンテーション能力が向上した。

2 成果と課題

成果は、主に2つある。第1にESDの理念を基盤とした実践が、児童の成長に大きく貢献できたこと。第2に様々な手法を組み合わせ、児童の多様な学びに対応していたことである。第1は、雅楽の実践において、西大寺北小学校とのオンライン交流等を通じ、雅楽という伝統文化への理解を深め、郷土への愛着を育むことができた。課題としては、教師の専門性向上のための研修機会の拡充が求められること、社会の変化に対応し、ESD教育の内容を常に更新していく必要があることであり、児童の学びをより深いものにできるように努力していきたい。

分野番号① 小学校 学習指導の部

理科教育の推進 ～県域での理科振興と、勤務校での具体的な取組～

生駒市立生駒南小学校 教諭 武村 篤人

1 実践内容

私は、教職に就いて以来、研究会の活動等で長年理科教育に携わってきた。初任から2年目に「熱とエネルギー」を題材として全国小学校理科研究協議会での授業公開を行ったほか、奈良県小学校理科教育研究会（以下、奈小理と略す）の研究部研修会に参加し、理科の授業づくりについて数多くの知見を得た。勤務校では、令和5年度より教科担任制推進のための人的配置措置を活用し、2校兼務という形で理科の専科を担当している。研究会での学びを生かしながら個人での教材研究にも注力し、高学年の理科で、以下の（2）に示す実践を行った。

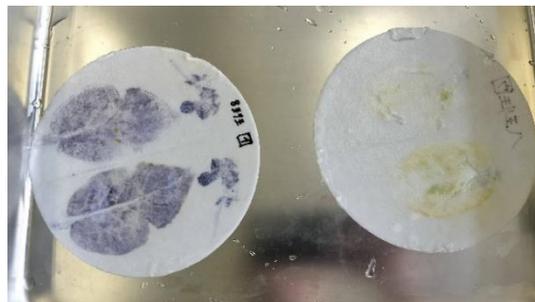
（1）理科研究会での活動

奈小理では、「子どもの学びの道筋を生かす理科学習」をテーマに授業の組み立て方を学んだり、教材研究を深めたりすることで理科教育への専門性を高めた。奈小理事務局に所属してからは、主に研究部への関わりが深く、定例研修会の運営に携わった。現在は研究部事務局長として研修会を開催する中で、講師の先生に学び、参加者の先生との交流から刺激を受けている。奈小理では事業ごとの担当はあるが、夏期実技講習会や学力調査委員会、学習指導研究会などに事務局全員体制で関わっている。講習の準備や学力調査の作問、指導案の検討時に助言を行うことで、奈良県の理科教育で大切にしたいことを伝えるようにしている。

（2）授業実践

①実験や観察方法の工夫で結果をより鮮明にしたり成功率を高めたりする手法を考案した。

- ・温めた可溶性澱粉液を使用した唾液のはたらき調べで成功率を上昇
- ・葉の澱粉の叩き出しに漂白を用い、変色の度合いを大きくする
- ・小型ジッパーバッグやクリームケースを利用したメダカの成体と受精卵の観察



【漂白を用いた澱粉の叩き出し結果】

②学習の導入や活用場面で興味を高める活動を取り入れ、児童が自分事として学習に

取り組めるようにした。

- ・モーターを発電機として利用し LED を発光させる体験
- ・てこのはたらきを応用してダブルクリップの改良案を考えるグループワーク

③ICT 活用による学習意欲の喚起と学習方法の更新・学級全体への情報共有を取り入れた授業づくりを行った。

- ・動画（自作を含む）を用いた解説で実験方法等の理解を手助け
- ・クイズアプリ『Kahoot!』を活用した学習内容の定着（エデュテイメントの活用）
- ・ロイロノートの操作性を生かしたワーク（てこの支点力点作用点を正しく示すパフォーマンス課題）
- ・AI ドリル（e ライブラリ、Qubena、ドリルパーク等）を用いた個別最適化学習の利用
- ・データの可視化とリアルタイム共有（共同編集等により、実験結果を即時共有）

（3）理科的環境整備

理科専科を担当することで、授業での実践以外にも校内の理科的環境整備に取り組むことができた。理科室の物品整理や使い勝手を向上させるための手入れをしたほか、備品の検索データベースの作成により、必要な教材の検索性を高めた。また、職員室近くのスペースでメダカや結晶の展示を行い、全校に対して理科に関心を向けるきっかけ作りを行った。メダカの受精卵は採卵日ごとに解剖顕微鏡を用意して成長を追えるようにし、成魚へのエサやりも児童ができるようにしたことで継続的に様子を見に来る児童が増加した。



【理科スペースでのメダカ受精卵展示】

2 成果及び課題

理科の研究会で身につけた専門性を生かし理科専科を務めたことで、児童の興味関心を高めることができた。学期末に児童が記述したふりかえりによると、植物の葉に澱粉ができる実験でクローバーがヨウ素液できれいに染まって驚いたことや、ゲーム形式の問題で印象に残ったことを挙げている児童がおり、指導に取り入れた工夫が成果を上げていることが見て取れる。発言においても、「（唾液のはたらき実験の結果が）全然違う。」「LED が光った!」のように、感動をもって実験や観察をおこなっていたことがうかがえた。所属校では、児童の基礎学力・主体的に学びに向かう態度の育成が課題となっているが、ICT 活用により積極性が高まり Kahoot! を活用した復習問題には繰り返し取り組もうとするなど学習に対する心理的ハードルは下がっている。教員の働き方や授業の質的变化についても効果があった。本務校・兼務校の教職員からの実感として、実験準備の負担軽減や専門性の高い授業による児童の学習意欲向上について好意的な意見が得られた。さらに、3年生以上での系統性のある指導について期待する声もある。

様々な実践を試みたことにより、理科への興味を高められたと推察できるが、取組の効果については客観的な指標での検証が必要である。専科としての実践はまだ2年目であり、これからも一層の充実をはかりたい。今後の活動として、勤務校ではもちろん、奈小理や各種研修会で先生方と関わる中で、自身の取り組みと経験を広め、子どもたちだけでなく教員に対しても理科の面白さを伝えてきたいと考えている。

分野番号⑥ 小学校 地域との連携・協働の部

実感を伴った経験から成長につなげる～地域との連携を通して～

葛城市立忍海小学校 教諭 上島 崇

1 実践内容

令和5年度に6年生を担当した。6年生の児童はコロナ禍の影響によりこれまでの4年間で様々な制限がある中で学校生活を過ごしてきた。児童の様子とコロナ禍における学校の状況を改めて把握する中で、児童には様々な経験や体験が不足していると感じた。

新型コロナウイルス感染症が5類に引き下がった小学校最終学年。これまでできなかった様々な体験や、普段の学校生活ではできない経験を児童の成長につなげたいと考えた。また、6年間過ごしてきた地域に愛着と誇りをもって卒業してほしいという願いから、地域との連携を学習に生かすことを考え学年をスタートした。第6学年の1年間の中で様々な分野や方面から、可能な限り連携授業等を依頼した。以下が実際に行った内容である。

- ・ 周辺地域の小中連携として青翔中学校による理科実験出前授業
- ・ 葛城市保健センターによる防煙教室
- ・ 葛城市歴史博物館の見学と学芸員による講話
- ・ 関西電力奈良支社による発電についての子ども電気教室
- ・ 葛城市のNPO団体「いろすまいる」による自分らしさを考える出前授業
- ・ 平和学習として大和高田市在住の大木一之氏による戦争資料の展示と講話
- ・ 平和学習として奈良県在住の秋山勝彦氏の広島での被爆体験講話
- ・ 新庄中学校生徒会による体験入学
- ・ 環境教育やキャリア教育として地元葛城市の高木包装株式会社との共同卒業制作
- ・ 葛城市教育委員会の真田昇先生による青年海外協力隊についての出前授業
- ・ 夢やキャリア教育として奈良県出身アーティスト川西奈月さんによる卒業コンサート

これらの連携授業の中で、平和学習としての資料展示会・被爆体験講話と、環境教育の一環としての高木包装株式会社との共同卒業制作について紹介する。

以前は広島への修学旅行の際に現地で実施していた被爆体験講話を、より身近に戦争について児童に感じてもらうため、令和5年度は被曝体験をもつ奈良県在住の方に本校に来ていただくことにした。以前から私自身が交流のある秋山勝彦氏に依頼し、広島での被爆体験をお話ししていただいた。加えて、本校の人権教育推進部と連携し、戦争資料を数多く集めておられる大木一之氏に資料展示と講話を依頼した。体育館いっぱいには当時の資料や物品等が並ぶ中、児童は目の前で様々な資料を見ながら大木さんの話を直接聞くことができた。



戦争資料を手にとってお話しされる大木一之氏に聞き入る児童の様子

また、児童は第4学年の時から環境教育の一環でSDGsの学習に取り組んできた。例えば、エコ葛城市民ネットワークと連携し、菜の花プロジェクトと題し、菜種油を絞るまでの体験などを行ってきた。環境教育に取り組むことで、自主的に地域のゴミ拾いをするなど、意欲的な姿が多く見られた。一方、校区内の段ボール会社である高木包装株式会社の取組に、段ボールの切れ端を活用して作品づくりができるキット「SDKids」があることを知り、学年として連携できないかを検討した。「SDKids」は一人用のキットではあるが、児童からは「せっかくならみんなでひとつのものを作りたい」という声が上がった。そこで、高木包装の協力のもと卒業制作として思い出に残る経験になるように準備を進めた。卒業制作のテーマを「轍～6年間の歩み～」と題して、1.4m四方の段ボールパネルを6つ用意し、6年間の各学年の思い出に残るシーンを段ボールの切れ端を使って表現した。

2 成果及び課題

私はこれまでも普段の学校生活ではできない経験や体験を大切にしてきたが、コロナ禍を経験した児童や我々教員にとって、児童の学びには実感を伴った経験があることが大切だということより実感した1年間だった。児童にとっては限られた1年間ではあったが、多くの体験や経験の機会をとることができた。特に、秋山氏や大木氏から学んだことは、平和学習の各班の新聞や平和集会を通して全校児童に伝える機会を取ることができた。

一方、それぞれの経験でついた力を児童にアウトプットさせる機会が少なかったのが課題である。出前授業等で学んだ力や経験を生かす機会を設定することで、より児童の成長や学びの定着につながるものと考えている。今後は、自分たちの学年だけでなく、各学年とのつながりや幼保小中も見通した12年間のつながり、さらには中学校区で連携し横のつながりも通して、学校全体、地域全体で様々な経験を児童にさせていきたい。そのような取組を継続することで、「自分たちの地域はすごい」「ここで生まれ育ってよかった」と自信をもって言える児童を一人でも多く育てていきたいと考えている。



3 その他参考となる事項

以下に、本実践でお世話になった各団体の URL をお示しする。

高木包装株式会社

<https://takagi-hoso.com/>

葛城市歴史博物館

<https://www.city.katsuragi.nara.jp/soshiki/rekishihakubutsukan/4/index.html>

NPO 法人色彩社会貢献事業 いろすまいる

https://www.instagram.com/npo_iro_smile/

分野番号① 小学校 学習指導の部

子どもの学びの道筋を活かす理科授業と子どもの見取り

河合町立河合第二小学校 教諭 新田 浩司

1 実践内容

(1) 自分たちで進める学びの実感

子どもたちが理科を学ぶことを楽しみ、自分たちで学びを進めていると実感できるようにしたいと思った。単元が始まる時に児童が知っていることと知りたいことを確認し、児童の「とても不思議!!」「どういうことか知りたい!!」という想いを大切に、児童から湧き出る疑問をつないで学びが続いていくようにした。それを基に単元の流れや順番も調整して、児童が知りたいことや気になることを自分たちで探究し続けていることを実感できるように工夫をした。

まず、単元の初めに単元内の学習内容について関心が高まる導入を用意した。それにより児童が興味を持ち、積極的に今までの経験や知識を思い出して活用できるようにした。次に単元の学習内容について「知っていること」と「分からないこと・不思議だと思うこと・知りたいこと」をできるだけたくさん児童が書けるようにした。児童が書いた「分からないこと・不思議だと思うこと・知りたいこと」を共有し、そのクラスで調べたいことをまとめた。単元内で調べていく順番も児童と相談しながら決めた。児童と教師が納得できる単元計画ができれば、学習を進めていくという流れを作った。

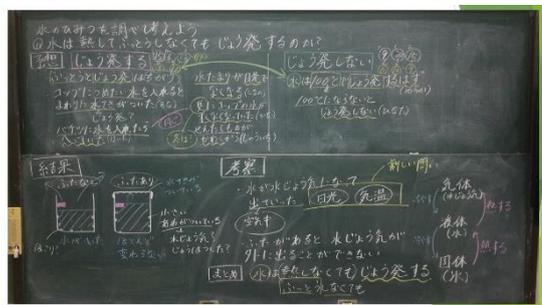


(2) 自分の考えを持ち、考えを共有して学ぶ

各学習では、児童が自分の考えを持ち、表現できるように工夫をした。特に予想や考

察では他の人が見て納得が出来るように根拠を示すことを重視した。既習事項や生活経験を根拠にして予想をすることや実験結果を根拠にすることが大切であることを児童と共有し続けた。また、絵や図を用いて表現することで分かりやすくなることもあることも共有した。児童の実態に応じて、言葉以外にも絵や図表で表すことや、写真や動画の活用、キーボードで文章を入力するなど自分に合った方法を自分で選択して表現できるようにした。

考えの共有について、予想の段階では初めに大まかな予想を黒板で整理した。自分がどの予想を支持するかを児童に問いかけ、それぞれの予想を支持する人数を黒板に書いた。その後、それぞれの予想に対する根拠を発表し合い、他の予想への質疑応答も行った。この際、既習事項や生活経験を根拠にしているものを評価した。板書では児童の意見や根拠を整理して、話し合いの流れが児童に分かりやすくなるように工夫した。児童の意見や根拠が出尽くしたところで、もう一度どの予想を支持するかを児童に問い、初めに支持した人数との変化を黒板で分かるようにした。自分の考えを持った上で話し合いを行い、予想の前後で支持する人数を確認するなど根拠を持った話し合いが出来るように工夫をした。



(3) 児童の見取りについて

学習指導要領に沿ってどのような資質・能力を高めたいのかということとその際に活用する見方や考え方を児童と共有し、それを基に児童の成果物を丁寧に見取った。児童が自分の成果物のよいところが分かるように線引きや丸の仕方、それぞれの児童に適したコメントの工夫を行った。よい表現や根拠・優れた見方や考え方があった場合は、学級や学年・異学年でも共有することで、全体の資質・能力の底上げを行った。これらの取組により、児童が自分たちで意欲的に理科の不思議を解き明かす活動をしながら、それぞれの児童が資質・能力を高められるようにした。

2 成果と課題

成果としては、単元の初めに知っていることと知りたいことを集約することで、児童の意欲を高めつつ、単元計画を効率よく考えることができた。教師と児童がともに単元の流れや学習内容を考えることで児童が自分たちで学びを進めていることを実感しやすいと考えられる。また文字・絵・図表・写真・動画・キーボード入力など一通りの表現方法を体験できるようにしてから、自分で表現方法を選べるようにしたことで、意欲的に自分の考えを表現できる児童が増えた。自分で表現方法を選べることで、自分に合った表現方法やそのときの学習内容に合った表現方法を考える姿も見られた。成果物の見取りに関しては、とても効果的であった。すぐれた根拠やよい見方・考え方を見取って、児童の成果物に「どこがどのようによかったのか」を分かるように書き込んで返却した。児童は自分の表現のよい部分を認識でき、回を重ねる毎に積極的に自分の考えを表現できるようになっていった。また、よい表現を学級や学年、または他の学年と共有することで、お互いにより表現を吸収することで全体の表現の底上げを行うことができた。

課題としては、単元の流れや内容を児童と考えるのは児童の学ぶ意欲を高めることができるが、時間的な制約はある。1年間の限られた授業の時間でどのように計画を立てて進めるのが難しかった。また探究していく中で検証方法の変更や再実験などが必要になっ

てくることが多いので、それも見越した時間の管理が必要になる。全ての単元で行うことは難しく、どこかの単元で探究的な部分を入れるなら、他の単元を効率よく進める調整をする必要がある。

成果物の見取りは丁寧な見取りをするためには膨大な時間が必要になった。こちらでも限られた時間の中で児童の成果物への見取りをする時間を捻出するのに苦労した。見取りの質を落とさずに効率よく児童の見取りをする工夫が今後必要であると感じている。

3 その他参考となる事項

令和6年度奈良県教育課程研究集会 小学校部会 理科

<https://www.pref.nara.jp/secure/313347/syogakkourika.pdf>

分野番号⑧ 中学校 学校運営の部

多角的な視点から見る生徒指導における組織づくりについて

奈良市立三笠中学校 主幹教諭 守山 雅史

1 実践内容

本校は、1947年創立以来、「よく考える人」「進んでやる人」「助け合う人」を学校目標に生徒の育成に取り組んできた。開校当初より「自由で開かれた学校」を校風として生徒の自主性を重んじ、現在の本校を支えるしっかりとした基礎づくりが進められていった。

生徒数は近年、やや減少傾向にあるものの、2024年4月現在で1年216名、2年226名、3年242名の計684名の生徒が在籍している。人懐っこい性格の生徒が多く、生徒たちは比較的穏やかに学校で生活している。学習に対して苦手意識をもつ生徒も多いが、授業にはまじめに参加し、課題等にも意欲的に取り組んでいる。その一方で、人とのコミュニケーションに課題をもつ生徒もおり、暴言や陰口が原因となるトラブルやSNS等のトラブルが起こることもある。

(1) 従来の生徒指導部会について

従来は、生徒指導事象を校内で共有し、対応について協議する生徒指導部会を週に1回設定していた。この生徒指導部会は、管理職・生徒指導主事・各学年の生徒指導担当教員・養護教諭・人権担当教員・教育相談担当教員が参加していた。

(2) 多角的な視点から生徒指導事象見るための組織づくり

生徒指導事象と一言で表しても、その態様はさまざまであり、何が起因となったかまで言及すれば千差万別であると言える。また、生徒指導の方法などについても令和4年12月に改訂された生徒指導提要からもわかるように、従来の生徒指導の方法から変わっていかねばならないことが多くあった。近年の三笠中学校における生徒指導事象についてふりかえると、問題行動が多く見られる生徒の中には、発達に課題がある生徒やソーシャルスキルに課題がある生徒が一定数いることがわかった。そこで、生徒指導部

会で行われる情報共有や事象への対応とそれ以降の指導の協議の中に、より専門的な見地からの考えを取り入れていく必要があるという結論となった。本校には通級指導教室が常設されており、通級指導の教員が在籍することから必要に応じて通級指導教室につなげていくことを目的の一つとして毎週の生徒指導部会に参加することとなった。さらに特別な支援を要する生徒が増加傾向にあり、特別支援学級に在籍する生徒の生徒指導事象が増加傾向にあることから、特別支援コーディネーターも生徒指導部会に参加することとなった。これにより、毎週の生徒指導部会を12名の教員で行っている。

このような組織づくりによって、部会で名前があがる生徒たちの課題予防的生徒指導と発達支持的生徒指導を多角的な視点で行うことができる。また、生徒指導部だけでなく多くの教員がかかわって指導や今後の方針などを考えることでチーム学校としての対応が行われていると考える。

(3) 組織づくり後の生徒指導部会について

毎週の生徒指導部会（2024年度は火曜日の2限）では、まずは各週での生徒指導事象について各学年の生徒指導担当より報告と事象の共有が行われる。その際に、対応や事象に関わる生徒について協議を行う。また、それ以外にも気になる生徒の情報については、情報共有がされる。その後、教育相談担当からの情報提供が行われ、生徒支援部（人権担当教員、通級指導教室担当教員、特別支援コーディネーター）から情報共有と生徒の支援の方針が情報提供される。養護教諭からはスクールカウンセラーの記録と保健室関係での情報提供が行われる。最後にその他に関わることについて協議等が行われ、管理職の先生からご意見をいただいている。部会に必要な時間はおよそ45分程度となっている。組織づくりをする前後において、部会内で取り扱う情報量は多くなり、必要な時間も増加している。ほとんどの情報は守秘義務の発生する情報である。部会での情報は、職員内で回覧することで学校内での情報共有を図っている。

2 成果及び課題

毎週の生徒指導部会では、名前が挙がる生徒について「どのような背景で何に問題があったのか」や「同じようなことが起きないために、どのような指導や支援をしていかなければならないか」について協議する。成果としては、次のような事例が挙げられる。

問題行動がたびたび起こる生徒Aについて、部会内で対人関係の方法について困難があるという結論になり、通級指導教室への打診を本人並びに保護者への打診を行う方針を立てた。この生徒については、通級指導教室に通うことでソーシャルスキルトレーニングを行い、生徒指導事象の回数が減少する傾向がみられた。また、生徒指導部会の中で挙げた生徒Bについて、生徒支援部や当該学年、部活動顧問等に関わる校内のケース会議を行う方針を立てた。このケース会議内で生徒Bへのできる支援が検討され、テストを別室での配慮受験とすることや医療機関への打診を行う方向となった。この内容を保護者や生徒Bに伝えたところ、生徒B自身が悩んでいたことや保護者等も気になっていたことが発覚し、前向きに学校からの打診内容を行っていくこととなった。

このように、多角的な視点から生徒指導部会で協議したことで、生徒たちに必要な指導や支援を行えたことが成果であるといえる。

一方で、生徒指導部だけではない多くの教員に集まってもらう部会については、時間割の作成上の課題が残る。本校は教員の数が多く、12名の教員同に介しても各学級の生徒たちの授業が確保されている。だが、すべての学校においてこの生徒指導部会のような組織とすることはできないであろう。また、部会内での情報量が多くなることで必要な時間も

増加する。部会内での情報量はそれぞれの部会でも違い、多くの時間を要する場合もある。時間の確保という観点から見ても課題はあるといえる。本校では、通級指導教室が設置されており専門性の高い教員がいることの強みを生かした。ただ、異動などがあることから専門性の高い教員が引き続き配置されるのかという課題がある。

今後は、この組織における部会を引き続き開催し、それぞれの生徒に応じた必要な指導と支援が継続して行われるようにしていく必要があると考える。

分野番号① 中学校 学習指導の部

「探究学習の視点を取り入れた校内授業改善」の推進

奈良市立若草中学校 教諭 新谷 太一

1 実践内容

「変化の激しい時代」・「答えの見えない時代」・「多様性の時代」と言われ、また、デジタル技術とAIが日々大きく進化する中で、教育現場に求められるものも大きく変わろうとしている。だからこそ、『答えのない課題に対して、多様な他者と協力しながら、みんなが納得できる解を見いだすことができる』という【力＝学力】の育成が重要である。そのためには、《知識や技能だけでなく、思考力・判断力・表現力とともに、学習力や人間性の育成》を目指した「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、『生徒たちが主体的に問いを持ち、問題を見つけ、課題を設定し、解決に向けて行動を起こすための学びのあり方』である【探究学習】の視点を取り入れた工夫を行うことが有効であると考えるとともに、学びにおける効果的なDXの活用も視野に入れながら、研究推進部長としての立場から学校全体での取り組みを進めている。

(1) 校内外における職員研修の取り組み

昨年度（令和5年度）より「探究学習に視点を取り入れた校内授業改善」を学校全体の研究推進目標に掲げ、探究学習の先進校である京都市立堀川高等学校教員を招聘しての校内研修や、奈良県立国際高等学校の探究学習現地視察を全教員で行うなどの研修・視察を重ねることで、「探究学習の視点を取り入れる意義」の周知を図った。また、校内においての継続した研究授業の実施にも取り組んでいる。



(2) 「若草中学校探究プログラム」の推進

総合的な学習のカリキュラムにおいて、プレゼンテーションやポスターセッションなどのアウトプットを重視した、3年間の系統立てた「探究学習プログラム」の確立を目指し、学校の全教員が【探究学習の視点】を理解・共有する流れの確立を進めている。

- 第1学年 「奈良探究」…世界文化遺産の東大寺をはじめ、多くの魅力を持つ郷里について、深く知り考える。
- 第2学年 「京都探究」…古都としての共通性を持つ京都について深く知り考えることで、視野を広げる。
- 第3学年 「若草探究」…故郷である若草の地を見つめ直し、自らの課題設定・解決に向けた探究を行う。

(3) 各教科学習における授業改善に向けた取り組み

前述の、学校全体としての【探究学習の視点】を大切にした教科授業の工夫・改善を推し進めるために、自身の英語科での工夫・改善はもちろん、各教科での工夫・改善を意図した校内研修の場を持った。特に、自ら学びに向かう力の育成に向け、【スプレッドシート】や【チャット機能】の活用等による「主体的・対話的な目標設定や振り返り」や「同時参照機能」の効果的活用についての研究も進めている。



2 成果及び課題

本年度は、文部科学省の「リーディング DX スクール事業」に本校区小中学校が認定されたことも絡めながら、6月に本校において、校区全小学校教員参加型の公開授業研究会を開催し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた、本校の「探究学習の視点を取り入れた授業改善」の取り組みを校区小中教員全体で共有することができた。また、総合的な学習のカリキュラムとして取り組んでいる「若草中学校探究プログラム」における、3年間を見通した活動内容のつながりの構築も進めることができた。さらには、「リーディング DX スクール事業」の先進地視察で得た知見を、まずは、校内全体の英語科授業に取り入れるなど、校内の授業改善に向けた教職員全体の意識を高める牽引役としての役割を果たすことができた。

今後は、「探究学習の視点を取り入れた授業改善」の『具体的な実践・活用例』の提示を増やしていくことが課題であると考え。そのためにも、できるだけ多くの教員とともに先進地視察や公開研究授業を行うことで、より多くの具体的な実践・活用例を知る機会を作ることが必要である。そのうえで、各先生方、各教科の特性を生かした『授業改善』の動きを加速させていくことが重要であると考え。

3 その他参考となる事項

校区の3小学校・1中学校の「小中一貫教育」の取り組みとして、今年度より全教員参加の公開授業研修を始めることができた。日頃の授業の様子を互いに交流し合うことで、『生まれ育った地域への誇りを胸に未来を共に切り拓く力をもった子どもの育成』という校区の共通目標の達成に向けた教育活動を活性化させるとともに、前述の「リーディング DX スクール事業」の枠組みにおける『デジタル環境を有効活用しながら、生徒の情報活用能力の向上、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実』という命題に向け、校区一

体となった取り組みの充実も図っている。

分野番号④ 高等学校 特別活動の部

ロボットプログラミングの指導による生徒の育成と地域貢献について

奈良県立奈良商工高等学校 教諭 吉竹 裕章

1 実践内容

本校の情報研究部の顧問を長年務め、ロボット競技の全国大会において生徒たちを令和元年と令和3年に全国優勝へ導いた。また、そこで得た知見を活かし、地域の催しや大会への参加、ロボットプログラミング教室を展開することにより、Society5.0の実現に向けて社会をけん引する力を身に付けた生徒の育成や地域貢献に尽くした。その内容について報告する。

(1) 各種ロボット競技大会への参加及び入賞

本校情報工学科の生徒が多く所属する情報研究部では、情報工学科の「目指せ、ITエンジニア」をテーマにした分野（プログラム、マルチメディア、ロボット）について知識を深め、技能の向上に切磋琢磨している。この情報研究部の顧問として、厚生労働省および中央職業能力開発協会主催の全国大会「若年者ものづくり競技大会」の「ロボットソフト組込み」職種に毎年出場している。この競技は事前公開された課題をもとに、当日変更された課題に対して、素早く正確にプログラムする技術を評価するものである。全部で三つの課題の合計点が高いチームが優勝となる。令和元年度・令和3年度には全国優勝へ導いた他、例年上位入賞を果たしている。（令和2年は新型コロナウイルス感染症拡大のため中止）

また、全国大会への指導経験を活かし、数多くの地域の催しや大会に生徒とともに参加し、Society5.0を地域から分厚く支える人材の育成を展開している。とりわけ、ロボカップという競技においては、国内にとどまらず、海外の大学等と競うことにより、より高い思考力や技術力を身に付けさせるとともに多種多様な考え方や視点から課題に気付き、解決策を考えさせるようにしている。

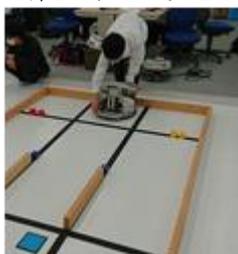


図1 若年者ものづくり競技大会県予選の様子

図2 競技ロボット

(2) 高校生によるロボットプログラミング教室

各種大会への参加等の活動を経た生徒を中心に生徒自身が講師となり、就学前の子どもや小中学生にロボットプログラミングを教える活動を行っている。奈良市のにじいろ（子育て広場&キッズスペース）では昨年、就学前の子ども約10名に簡単なプログラムで動くロボットと一緒に遊ぶことによりプログラムに触れてもらった。また、奈良市はぐくみセンターで年間2回、「高校生によるロボットプログラミング教室」を開催し、毎回約20名の小学生にプログラミングの楽しさや、技術を伝えている。中学生に対しては、出前授業として毎年プログラミング教室を実施しており、奈良市立都跡中学校は3年生全員に若年者ものづくり競技大会で実際に使われたロボットを用いたプログラミングを体験してもらっている。



図3. プログラミング教室の様子。幸いなことに、このロボットプログラミング教室に参加し、授業を受けた児童・生徒が、ロボットやプログラミングの学習に取り組みたいと、本校に入学するケースも増えてきている。

(3) 高等学校DX加速化推進事業

文部科学省の高等学校DX加速化推進事業の一環として、本校工業科ではロボットプログラミングをはじめ、新たに児童・生徒の関心が高いと思われるスマートフォンなどのアプリケーションソフトの開発を授業や情報研究部の活動で行うとともに、校内に「デジタルものづくりLab.」を開設し、地域にもものづくりの楽しさを発信していくことでプログラミングに興味関心をもってもらうきっかけをつくっていく予定である。

これからも地域の催しや大会等で情報研究部の顧問として実績をつくり、情報を積極的に発信していくことで、高校生から小中学生、就学前の子どもまで、プログラミング的思考をもち、プログラミングに魅力を感じてもらうための良いループを作り上げ、Society5.0の実現に向けて社会をけん引する力を身に付けた人材の育成を続けていきたい。

2 成果及び課題

このような経験を通してグローバルな視点をもってコミュニティを支えることができる地域のリーダー的存在になる生徒を育成することができている。多くの生徒は卒業後、さらにプログラミング等の情報分野を学ぶために大学に進学しており、大学卒業後はSociety5.0の実現に向けて社会をけん引するような企業に就職している。

今後の情報化社会では、プログラミングの知識をもつことのみならず、プログラミング的思考で問題を解決に導く力が必要とされている。プログラミング的思考は、将来プログラミングに携わる仕事に就きたい子どもに限らず、これからの時代を生きていくにあたって普遍的に必要となる力と考えられている。今後、ロボットプログラミング教室のような催しを実施する際には、多くの児童・生徒にプログラミング的思考の必要性についても、これまで以上に情報発信していきたいと考えている。

3 その他参考となる事項

中央職業能力開発協会ホームページ

<https://www.javada.or.jp/>

奈良県立奈良商工高等学校ホームページ

<https://www.e-net.nara.jp/hs/narashoko/>

分野番号⑤ 特別支援学校 特別支援教育の部

「チーム奈良ろう」を目指した取り組み ～ろう教育の専門性の向上を目指して～

奈良県立ろう学校 教諭 山本 明子

1 実践内容

ろう学校の保育・教科指導にあたっては一般的な教科指導の技術を磨くことに加え、聴覚障害教育特有の専門性が必要となる。個々の聴力に合わせた聴覚学習、手話・指文字・文字・音声・口形等を活用したコミュニケーションや日本語指導、目線の集め方、教材提示の仕方など、聴覚障害に関わる専門的な内容は多岐にわたるため、その継承・維持・改善は大きな課題となっている。ろう学校の経験年数に関わらず、時代に対応した専門性を身につけるためには、継続的な教員研修が欠かせない。

本校では、これまで早期教育部から高等部まで学部を縦断した教科別縦割りグループを作り、教科ごとに公開授業を実施していたが、授業力向上を目指した公開授業にも関わらず事後検討会は感想に終始したり、ろう教育の専門性に関わるポイントが議論されなかったり、深まりに欠けるものであった。私自身、研究部長として研究活動に携わる中で、授業研究の方法を見直し、専門性の向上を図っていく必要性を痛感していた。令和5年度に「全日本聾教育研究大会奈良大会」を開催するにあたり、令和3年度に大会事務局長を拝命したことをきっかけに、研究部長として研究体制の改編に着手した。具体的には、従来の教科別縦割りグループから「学部」を研究グループとする体制へと改めることで、教科等横断的な視点で組織的に研究に取り組むことを目指した。また、0歳から18歳までの子どもたちが通うろう学校において、育成を目指す資質・能力をすべての教員が共通理解するために、研究通信の発行や授業研究会の定例化など、体制整備を進めた。



校内研究通信

2 成果および課題

(1) ろう教育の専門性の向上

専門性の向上に欠かせない授業研究会は、毎月二回実施することとした。「教科指導」に加えて、「授業のねらいの立て方」「個々の幼児児童生徒への対応」「聞こえにくいことへの配慮」「聞こえにくいことから起こる課題への対応」「評価の方法」など、教科に関わらず共通するろう教育の基礎的・基本的な内容について討議を深めることを意識した。毎回一つの授業を取り上げ、事前検討、指導案作成、板書計画、実践、事後の振り返りを丁寧におこない、次の授業づくりに生かす作業を繰り返すことで、ろう教育に関わる共通した配慮点を



幼稚部授業研究会の様子

整理

することができた。また、ろう教育の経験の浅い教員が少なからずいることも前提に、改めて「ろう教育の基本」について協議し、授業の見方・考え方や課題を共有することで、専門性の向上につながる研究の場となった。さらに、「全日本聾教育研究大会奈良大会」の実施に関わり、令和3年度から3年間にわたり年2～3回程度、聴覚障害教育を専門とする著名な大学教員を招き、保育・授業の参観、助言をいただく機会を設けた。全国のろう学校を数多く参観されてきた大学教員との連携により、子ども同士のやり取りの活発さや、手話を使用した「分かる」保育・授業の工夫など、研究の中で進めてきた内容や、自分たちでは気づいていなかった自校の強みをご指摘いただけたことも、研究の大きな推進力となった。

(2) 教科の枠を超えた活発な議論

授業の振り返りツールとして、小学部で作成した「授業評価シート」を使い、自分や

他教員の指導の様子を4段階でチェックした。中学部は、生徒用の「振り返りシート」を作成し、生徒が書いた授業での感想や気づき、考えたことをもとに授業改善を話し合った。幼児児童生徒同士のやり取り、板書など視覚支援の示し方、ICT機器の活用、個と集団の学びの往還など、ろう教育に関わる指導について議論することを徹底したことにより、教科に関わらず学部の教員全員で学び合える実感が持てるようになってきた。それに応じて、教員が授業研究会での学びを自分事として捉えられるようになり、意見を活発に出し合えるように変化してきた。

(3) 地域のセンター校として

聴覚障害教育のセンター的機能を発揮すべく、地域の難聴学級担当教員を対象にした担当者研究会を年2回実施している。また、小中学校、高等学校等の研修会等に講師として特別支援部の教員が参加し、授業研究会で明らかとなった知見を活用して障害理解教育や助言等を行っている。なお本校では、聴覚障害への理解啓発を促進するため、聴能部が中心となり「音・きこえのノート」（きこえや補聴器、合理的配慮について掲載）を年間8回程度、メール等で配信している。

(4) 今後の課題

多様な教育的ニーズを持つ聴覚障害児へ対応していくためにも、今後ますます「チーム奈良ろう」の実現に向けた研究が必要である。経歴や個性、専門性が違う教職員一人一人の力が遺憾なく発揮できる体制の整備について、さらに検討を重ねていきたい。

3 その他参考となる事項

奈良県立ろう学校 ホームページ内 「音・きこえのノート」

<https://www.e-net.nara.jp/sns/rou/index.cfm/6,0,92,html>

分野番号⑦ 小学校 国際交流の部

自分を見つめ、他者を受け入れる心を育てる教室づくり

～国際理解教育とコーチングの視点を取り入れて～

天理市立朝和小学校 教諭 田端 浩多

1 実践内容

小学校高学年になると、自分自身や友達のイメージを固定させている姿にしばしば出会う。その中には、「自分はどうせ…」と自らの可能性を狭めていたり、「この人は苦手だ」と他者との関わりを諦めていたりするものもある。これは、自分らしく生きることへの障壁になったり、集団への不適応を起こしてしまったりすることの要因になりうる。本報告では、そのように固定化されたイメージを手放し、自分らしさを取り戻したり、他者の新しい一面を発見してつながり直せたり、不適応を克服したりすることができた日々の実践について紹介する。

（事例1）異文化理解から、相手の「背景」に着目する姿勢を育む授業実践

2023年度、筆者はJICA 関西が主催する教師海外研修に参加し、ペルーの文化や教育について勉強した。そのなかで実感したことは、「背景を知ること、相手を理解しようとする姿勢が生まれる」ということだ。例えば筆者は、「ペルーでは1日に5000台ものスマートフォンが盗まれる」という統計を見て、ペルーのことを怖い国だと思っていた。しかし、その理由として、難民問題や貧困などが背景にあることを知った。期間中に関わったペルーの人たちは温かく、ペルーへのイメージが良いものへと変わった。

この経験から、「一見理解できないことに対しても、背景をイメージすることで、相手を理解しようとする姿勢が育めるのではないか」「子どもたちのなかで、固定化されたクラスメイトへのイメージを変えるきっかけになるのではないか」と考え、その姿勢を育むための授業を、全4回構成で立案・実践した。

実践のなかで、子どもたちはペルーという国に対してのイメージを変化させるだけでなく、自分自身の性格や、クラスメイトの行動に対しての背景を想像し、イメージを変化させていった。実際のふり返りは次のとおり。

「ペルーの印象は、1回目に授業を受けたときに下がってしまった。けれど、背景があることを知って、それを深掘りするのが楽しかった。今はペルーに行きたいです。」

「改めて自分や友達を見直すと、嫌なところも面白いところも出てきて、『こんなことがあったのかのしれない』となりました。ペルーの授業で学んだように、『背景』をキーワードにして、『なぜこうなったのか』を自分なりに考えることで、『絶対こうだ』とか『そんなはずない』などの決めつけが減り、『たしかにありえるかも』が6-2でも増えた気がしました。」

（事例2）子どもたちの自己効力感を高めるためのコーチング的手法

日々の学級経営において、子どもたちの自己効力感を高めるため、教師主導で物事を決めるのではなく、コーチング的手法を用いて、「子どもたちが『自ら考え、生み出す力』を引き出すこと」「自分の考えを相手に伝え、相手の考えを聴いて、歩み寄るゾーンを見つけ出すこと」を重視している。例えば、給食当番では「1班は大おかず担当」程度の大まかな枠組みしか示さず、細かい役割は子どもたち同士で決めている。毎朝、役割や運営方法を話し合ったり、ふり返ったりする時間をとり、その都度子どもたちは、自分たちでマイナーチェンジをしている。導入時はスムーズに運営できないことも多いが、子どもたちは試行錯誤しながら、自分たちに適した方法で運営している。他には「プロジェクト活動」として、学級に必要なプロジェクト活動を、必要なときに子どもたち自身が考え、つくり出していく。そうした過程のなかで、子どもたちは次第に「自分たちでクラスや学校をよくしていける」という感覚を醸成させ、主体的な姿を見せるようになっている。



この取組のなかで大切にしていることは、話合いの場において、自己受容・他者信頼・貢献感を促進させることである（このことは、オーストリアの心理学者、アルフレッド・アドラーが提唱する「人が幸せを感じる“3つの条件”」に基づいている）。自分ができているところに注目したり、自分はどんなときに幸せを感じたり苦しかったりするのかを発見したり、本心や葛藤に目を向けたり、相手に対して適切にアサーションしたりするなかで、子どもたちは自身の可能性に気づき、視野を広げている。

2 成果及び課題

友達関係に悩んでいた児童は、相手に思いを伝えることで関係を改善させることができた。また、教室に入れなかった児童は、自分のしんどさを表現できるようになったことで友達から理解され、教室に入れるようになった。さらに、学校生活に期待していなかった児童は、「自分の向き合い方で、いくらでも楽しくなると学んだ」と口にするようになった。これは、子どもたちの「自己受容・他者信頼・貢献感」が満たされたことで起きた変化だと考える。

一方で、多様な課題や悩みを抱える子どもたちを、1人の教員がカバーしきることは難しいと感じている。筆者自身の引き出しを増やそうと努めることはもちろんだが、全教員がそれぞれの引き出しを生かし、そして統合し、全校の子どもたちを見取り、導くシステムづくりが必要である。今後、ミドルリーダーとして学校の中核を担う者として、そうした考えを浸透させるために邁進したい。